

## 〈アジアダイナミズム研修 済州フォーラム2016〉 飛 翔

経営情報学部 3年 田中 優希

まずは、出会いに感謝したい。済州島という地に集まった世界各国の人との出会い、その場所で共に学び、考えることができた事に。その出会いは、多摩大生65人が参加したJEJU FORUM -FOR PEACE & PROSPERITY 2016~にあった。韓国外務省と内外の大学と研究機関が支援する済州フォーラムは、東アジア地域の平和と共同繁栄を模索するための議論の場として2001年にスタートし、アジアの平和と繁栄という一貫したテーマでアジアにおける共同体建設に寄与している。アジア版ダボス会議や日経フォーラムのようなイメージだと考えれば分かりやすく、多摩大は4年目の参加である。

それは、普段の日常生活の中では学べないようなことが学べ、様々な経験ができる場所。パン・ギムン国連事務総長やマハティールマレイシア元首相等の世界トップの直接の話を通じて、過去・現代を問い、未来を考えることができる場所。多摩大学の特別講座や私が参加しているインターゼミで学んでいる「アジアの視座」の最前線議論がこの場所では行われたのだが、その中で私は3つのことを具体的に学んだ。

1つ目は、アジアの平和とそのための日本の役割を改めて考え、そして経営経済の最前線事例と見識を学んだことである。世界の政治リーダーの見識に直に触れたことで、国際関係と歴史、外国語の勉強が大事だと痛感し、また、シーメンス社長やテスラ・モーターズ共同創業者が語る経営戦略からイノベーションの意味の重要性が少しはわかった。

2つ目は、人脈を広げることの必要性。今まで私は、人脈という言葉が嫌いだった。というのも、人脈という言葉には仕事上だけの関係や、建前上の言葉だと感じていたからだ。しかし今回、お世話になった多くの社会人や外国の方々と交流する中で「人脈」という解釈が自分の中で少しずつ変化してきた。

済州フォーラムに参加していた日本の経営者を含む社会人の方々は互いを尊敬し、年齢や立場、国籍に関わらず、対等に意見をぶつけ合っていた。私たち学生にとっては社会人の知り合いなど数人で、まだ縁の

ない言葉かもしれない。しかし、これからの将来の中で必ず必要になってくることは間違いない。多摩大学は、産業社会の最前線に立つ社会人が講師をしてくださる機会が多くある。私はそのような素晴らしい環境の中で、人脈を広げないのは勿体ないと気が付き、今後はより授業で積極的に発言し、交流したいと思った。そして一番重要なのが、仕事上や建前だけの関係で終わらせないことである。私が求める人脈とはもっと柔らかいものを指す。済州フォーラムで出会った多くの社会人の方々とプライベートの時間を共有できる、「友達」のような関係をつくることが大事であり、社会人や外国人との交流を取り入れているアジアダイナミズム研修ならではの企画に感謝したい。

3つ目は、飛翔すること。これは済州フォーラムの日本セッション「企業感性〜グローバル・リーダーシップ哲学〜」で、行徳哲男先生がお話しされていたキーワードである。現在の日本人はまさに奴隷やロボットのように気迫がなく、かつての経済大国の存在感はアジアでもなくなっている。多くの日本人は、上の立場の人間の言うことに従い、自分の意見は心の中に留めておき、自由もない。このような活力無き日本の社会を変えるのは私たちの世代だ。昔の考え方や常識を壊し、新しい時代を切り開いていくのが私たちの役割であると、日本セッションやアジアの活力の話から読み解いた。

フォーラム期間中に印象深いことといえば、多摩大学と済州ハンラ大学との交流会での韓国学生のフレンドリーさである。互いを理解するための文化発表やプレゼント交換、フェイスブックを通じた交流などは一生の思い出になるであろう。また、多摩大生のために村山富市元首相の挨拶があり、自身の人生経験とアジア平和の思い、日本を背負う若者への激励を予定時間をオーバーしてまで熱心に語ってもらった。

4日間という短い時間ではあったが、とても濃く充実した時間だった。この経験を活かし、これからの大学生活、そして社会人になってからも活躍していきたいと思う。



国連事務総長や世界6か国元首相の参加となった済州フォーラム



多摩大生・教職員と村山富市元首相との記念写真

## 〈木村知義プロジェクトゼミ〉

# メディア実践論の制作現場から

いざ「七夕」へ！私の作品制作がはじまった  
～ゼミをテーマにドキュメンタリーを撮る～

経営情報学部 3年 開発 勇太

「開発ならこのプロジェクトゼミは好きになるよ」

友人のこの一言で私は241教室に行くことになった。PCの並ぶ、だだ広い教室の前の方に10人ほどの学生が集まっていた。席に座ると「キミは・・・？」と、見慣れない顔の私に、先生が声をかけてきた。

「ちょっと興味があって・・・、覗いてみるだけでですけど・・・いいですか？」

そこには私にはない感性や考え方の持ち主で、これまで見たことのない映像番組を見せてくれたり、聞いたことのない話をしてくれたり、なんだかユニークで元気な「おじさん」がいるな、と。これで、私の履修は決まった。去年、11月のことだ。

私の所属しているホームゼミは村山ゼミだ。メディアでも取り上げられることの多い、学外での活発な活動で知られるゼミだ。充実している楽しくもあるが、正直言って忙しい！自分の時間がなかなか作れないという悩みもあった。時間があればもっと楽しいことをしたい、体験したいいつも思っていた。たまたま1講義分の時間が空いていたので友人が履修している教室に「参加」してみたというわけだ。充実した時間、楽しい時間を求め私は春学期にプロジェクトゼミの教室に顔を出した。

「おお、来たね！えーっと、名前は・・・」と、あのおじさん、いや、木村先生。昨年私の名前をメモした紙切れを探しながら、うれしそう顔。

プロジェクトゼミ「メディア実践論」への正式な参加はこんなふうにはじめたのだったが、以前から使っていたと思っていたビデオカメラがこのプロジェクトゼミにあるとわかっていたので、私はとにかく早くカメラに触りたいと思った。

カメラ実習の日がやってきた。実際に触ってみると、カメラの重さ、ズームの動作などにもかまがまるで「我が子」のように愛らしく感じられ、これは大切に、しっかりと使ってやりたいと思ったのだった。

「感じたこと、知ったこと、思ったことをとにかく書き留めて、見えるように掲示する。そうすることで自分が、何を、どうしたいのかがまとまってくる」と教室で言われたが、なるほどと実感。不思議とこの方法はしっくりくる。教室で話を聞き、先輩達の作った過去の作品や参考に視聴する番組を見ていくうち、ゼミの活動をテーマにするなら、ドキュメンタリーだと確信するようになった。

村山ゼミでは7月7日に増上寺で大型イベントの本番がある。七夕のイベントだ。大型のイベント場合、企画と広報に担当が分かれる。企画の考えるイベントの伝えたい思いとは。織姫と彦星は7月7日の夜にしか会えない。二人はこの日をどのように思い、感じてきたか、待っている時は何を思い、何を感じているのか。そして、会った後は。企画担当者たちは徹底的に考えて、二人の感情を描き創造する。広報は企画の思いを伝えるにはどうするかを考える。プレスリリース、ポスター、チラシ、言葉の一つひとつを何時間も考える。徹底的に深掘りし、イベントの魅力を伝える。企画と広報が最大限の力を発揮した時、何が生まれるのか。人の心を動かすこのイベントの裏に隠された汗と涙の結晶を表現していきたいと思う。

もちろん、初めての経験で不安だ。でもやっぱりこれが映像作品の制作の面白さなのだろうと感じる。

7月7日、七夕の挑戦へ！私の目標が近づいてくる。



さあ撮るぞ！胸躍る七夕へ（筆者、右）

インタビューってむずかしい！  
「多摩川・せせらぎ館を訪ねて」の取材から

経営情報学部 4年 大貫 瑠奈

インタビューってむずかしい！

去年夏休みにロケをした私の企画「人と生き物のふれあいの場～多摩川・せせらぎ館を訪ねて」の取材・制作を通して身にしみて痛感したことだ。もちろんこの「メディア実践論」では他にもいっぱい「むずかしいこと」にぶつかり、悩む。しかし、インタビュー、つまり人に話を聞くことは本当にむずかしい。

ロケ日記を少し振り返ってみる。

私は最初、何から始めたら良いのかわからず躓いた。で、「とりあえず・・・」と、取材内容を決めることと、協力してくれる友人と日程を話し合うことを同時に行った。日程は何日～何日なら大丈夫と期間を設けることでアポを取る時に融通が利くよう工夫した。しかし、悩んでいた期間が長かったために動き出しが遅くなってしまい、アポを取ろうにもせせらぎ館が休みに入ってしまったため電話が繋がらずアポが取れたのは予定していた日の数日前になってしまった。

ロケ当日はまさかの雨・・・

カメラは濡らせない、空もどんより暗い。ロケは日を改めたいと思った。今でも、撮影した映像素材を見るたびに、晴れていたら・・・と思う。

そして、インタビュー。

あの時はロケに行く前は上出来だと思っていた準備が、今思えば準備不足だと分かる。

なぜもっと「質問」を考えなかったのだと自分を叱りたい。私の考えていた質問は取材に応じてくださった「せせらぎ館」の齋藤光正さんにとってはせせらぎ館の説明として毎回話すような内容だったからだ。齋藤光正さんは、せせらぎ館の概要説明として私の考えてきた質問の答えをくれた。いざ、その先のインタビューをと意気込んでも「問い」がまったく思い浮かばなかった。結果、話は広がらず、齋藤光正さんが時間を割いてくれたのに、その時間を有意義なものにできなかった。ホント、落ち込んだ。もっと何かができただろうと・・・

そして、私は、この取材から多くを学んだ。取材に行く前に徹底的に調べつくして沢山の「なぜ？」を抱えていくこと、話を広げ、深めるために相手の話をよく聴き、少しでも「これはなに？」と思ったことは小さなことでも聞いていくことが大切だと。「聞く」前に「聴く」ことが試されるという事を知ったのだった。

教室で、インタビューはむずかしい！と習っていたが、その時はあまり記憶に残らなかった。たしか「問いは、答えだ！」と聞いたように思う。相手の答えのすべては「問い」によって決まるのだと。

「問い」が生まれぬ辛い思い出しながら、人の話を深く聴き取ることで、そこから問いを生み出す力を鍛えていくことが本当に大事なのだと、わかるようになった。そのためには普段から、どんなことでも「そうなのかな・・・」と問い直してみる暮らし方が大事になると思う。

この経験は就職活動にも活かしている。的外れな質問をして悪い印象を持たれたくないと思わずに、徹底的に調べて疑問に思ったのなら怖がらずに聞いていく！聞いていけば等身大の企業の姿が見えてくるからだ。

「せせらぎ館」のロケで学んだことは沢山あるが、今私にとって「問い」の大切さ、「聴く」ことの大事さを学んだことはとても大きかったと思う。問いを生み出すことのできる人間にならなくては！そのために、感じて、考えて、勉強して深めて・・・でも、インタビューって本当にむずかしい。



多摩川のある風景は私の「心のふるさと」（せせらぎ館前で）

私が SGS に進学した理由は、1. 英語を忘れないこと 2. 1年間の長期留学ができることでした。

私は、高校時代から6年間カナダで過ごしました。カナダで学んだことは、何事にもチャレンジする事・自分で動く事でした。現地では、地元のアイスホッケーのチームやボランティア活動に参加し、アジア人=テルと言われる様になりました。

日本に帰国後、私は英語が使える、海外大学への交換留学が行える進学先を探していました。そんな時に会った大学が多摩大学でした。英語での講義はもちろん、長期留学の提携大学も多く、多摩大学へ進学しました。

入学当初は、英語の集中講義にとっても苦労しました。高校からカナダに居た為、文法やレポートの書き方をしっかり教わったことがなく、ついていくのがやっとでした。また多摩大学に進学できたからこそ、多摩大学に恩返しできる事をしようと考えた私は、1年次からオープンキャンパスの運営スタッフとして活動し始めました。キャンパススタッフとして学んだ事は、学生スタッフ・教員の方・高校生に正直である事。どんなに多摩大学をアピールしても、それが多摩大学に進学して高校生の夢に繋がるとは限らない事。私は高校生の夢ややりたい事ができると感じた訪問者にしか、多摩大学を勧めませんでした。

当初ドイツへの長期留学を考えていました。理由は、高校はカナダ(北米)、大学は日本(アジア)で勉強して居た為、ヨーロッパで学んでみたいと考えたからです。しかし、大学の先生方と話している中、シンガポール留学を勧められました。当初のシンガポールのイメージは、マライオンと大きな船がのっているホテルがある国というざっくりとしているものでした。しかし、調べていく内に私の気持ちは変わっていきました。たった50年で経済大国になった事、共通言語が3つもある事、教育レベルが世界屈指である事。このような国で勉強したいと強く願い、シンガポールへの留学を決めました。シンガポール留学前のビザの手続きや単位交換の手続きなど、分からないことは国際交流課にて解決しました。そのため留学は初めてではありませんでしたが、不安要素は殆どなくシンガポールに渡ることができました。最後までサポートして下さった国際交流課にはとても感謝しています。

2015年4月16日、私はシンガポールへ渡りました。

目標は、「全ての授業に合格する事」「シンガポールを知り尽くす事」「4ヶ国以上訪れる事」としました。

現地では、興味があった「人材育成論」「マーケティング論」などを履修しました。全ての授業はとても興味深く、実際に企業に向いたり、企業の社員の方が授業の講師になったりしました。大変だった事は、グループでのレポート作成です。レポートを進める中で、シンガポール公用語の中国語が話せず意思疎通ができない、それぞれの進捗状況がわからない、Webや書物のみでは古い情報しか集める事ができないという3つの問題点がありました。そこで、異文化の人々と協力して成果を出すためには「コミュニケーションの円滑化」、「進捗管理」、「企業の生の声を聞く事」が必要と考え、以下の3点を工夫しました。

1. 英語を共通言語に設定
2. 1週間に1度の経過報告会を設定
3. 自ら企業と連絡を取り、実際に企業に出向き取材

以上を行った結果、私達のレポートはクラスの中で最高点をとる事ができました。他の授業でも努力を重ね、全ての授業でB以上の評価を得る事ができました。現地で生活をする中で感じた事は、シンガポール人は皆ビジネスレベルで2カ国語以上話す事ができ、世界でもトップレベルの教育水準の中で学んでいる事です。

授業の空き時間や勉強に疲れた際は、行き先を決めずに様々な場所を訪れました。シンガポールは公共のバスや電車が整備されて居た為、観光地だけではなくシンガポールの良さを知ることができました。

また、夏休みと冬休みを使い「マレーシア・インドネシア・タイ・カンボジア」に一人旅をしました。シンガポールや日本の様に、舗装された道や高層建物などがなく驚きました。また、ポロポロの服を身にまとった子供達がお土産を売っている風景を見た私は、東アジアを中心に日本製品を広め、人々の生活を豊かにしていきたいと考えるようになりました。

東アジアで、経験した事が今現在の就職活動の軸となっています。多摩大学に入学前は、商社などに入り、海外商品を日本に広めていく事を考えていました。しかし、入学後の学習やシンガポールでの学習で、考えが変わりました。私は、日本だけでなく様々な国の発展を手助けしていきたいと思います。



グループプロジェクト



留学生サッカーチーム



シンガポールシティツアーにて



留学生歓迎会にて

## 学生会新入生の挨拶

経営情報学部学生会執行部 1年 吉田 京悟

この度学生会に入りました吉田京悟です。今年の学生会での抱負は「先輩たちをサポートする」ことです。そこから様々なことを学んで成長していきたいと思っています。1年生は今のところ二人しかいないので覚えることも多いと思いますが、自分たちが上級生になり先輩方と同じような立場になったとき、学生会で得たものを次の世代に受け渡せるようになるのが私の最終的な目標です。

私が学生会に入った所以は、実は高校生の時に生徒会に入っていたのですが、そこから人とのコミュニケーションだったり、先生とのつながりだったりしたものを得ることができ、辛いこともありましたがとても良い体験をしたからです。それを今度の大学生活で活かし、有意義な学生生活を送りたいと思ったので学生会に入りました。

これから学生として学生会メンバーとして精進していきたいと思っていますので、よろしくお願い申し上げます。

## 私がやりたいこと

経営情報学部学生会執行部 1年 渡邊 健史

学生会に新しく入った1年の渡邊健史です。以前より私は多摩大に入って新しい事をしたいと思っていました。高校からの友人が一人もいなかった私は何をしたらいいのか全く分かりませんでした。大学生活4年間ひとりぼっちという危機感を感じサークルに入ることを決めました。どのサークルに入るか悩み、高校時代に学級委員で学んだ“皆で協力して物事を成功させる喜び”と、“運営する楽しさ”を大学でも味わいたいと思い、悩んだ結果学生会に入ることに決めました。

私の抱負は、前述した通り「新しい事をしたい」ですので、卒業までにイベントの企画をしたいと思っています。なぜなら人が成長するのは、新たな挑戦とその試行錯誤だと思っているからです。たとえ失敗しても次に繋げる。そうすれば経験が徐々に自分と、結果的に所属しているコミュニティの質を高めてくれると思っています。留学生交流会が無事に終わり次のピアガーデンに向けアイデアを思案中です。

度々ご迷惑をおかけすることと思いますが、これから4年間よろしくおねがいします。

## 留学生交流会

経営情報学部学生会執行部 1年 吉田 京悟

5月20日に留学生交流会を行いました。交流会には18名の留学生と18名の在籍生が参加し、和気あいあいと楽しむことができました。最初は留学生と在籍生が合同でレクリエーションをしました。次にサークルの日本伝統文化研究会さんにご協力いただいて、茶道と投扇興を行いました。

留学生の皆さんには日本の文化を知ってもらえたかと思います。茶道を実践してもらった際には、積極的に取り組んでくれましたが、休憩時には正座からの解放により、大変リラックスしている様子うかがえました。夕食の時には、日本の食文化を体験してもらうためにお寿司を用意しました。すべての席でお寿司を食べながら交流してもらいました。各々のテーブルで盛り上がり、完食してもらったことを嬉しく思っております。

最後に参加者全員で記念写真を撮り、無事留学生交流会を終えることができました。

参加協力くださった教職員の皆さん、学生の皆さん、日本伝統文化研究会さん、多摩祭実行委員の皆さん、本当にありがとうございました。



参加者全員での記念写真



留学生の皆さんが日本伝統文化の投扇興を体験